

## クリスマスカード

牧師 山本 護

もう20年以上経つだろうか。ギリシア語原文と古い和訳で降誕の御言葉を書き、拾った葉っぱを張りつけたクリスマスカードを作るようになって。今年のは文語訳(1917)よりも古いニコライ訳(1901)で。「言ハ肉體ト成リテ我等ノ中ニ居リタリ(ヨハネ 1:14)」。いくらか私の昔趣味もありますが、音声として口の端に現われやすい言葉遣いを重視し、古い著述体に傾くのです。

葉っぱは自然に落ちたものを使います。木についているものだといくら鮮やかでも褪色してしまう。「なあるほど」、化学変化ではなく人文的な警句になりました。同じ種でも落ちた葉は、木にある時より形状色彩ともにおそろしく多様です。虫に食われ、陽と影の度合い、風の加減でこれほどまでに違っているとは。まるで人間の生涯じゃないか。

クリスマスは、神の子が天から地上に降りて来た徴。そう考えると、高い樹上からはらはらと地に落ちた葉をカードに用いるのは、しごく自然のことに思われます。晩秋の数日間そこに、巧みな管弦楽のように個の色彩が互いを響き合わせる天国が現れる。

天国に立ち尽くし、V.ヴェンダース監督の『ベルリン・天使の詩 (1987)』の一場面を思った。その御使いは天に居て人間の運命をつぶさに見て来たわけだが、サーカスの空中ブランコ乗りに恋をし、永遠の命を手放しても人間になりたいと願い、それがかなえられる。天から地上に墮ちて血が流れたその場面からモノクローム映像はカラーに変わる。天はモノクロームだが地上には色があり、人間の悲哀と慎ましい喜び、高貴さと強欲が横溢している。この地上に存在することの、なんとも絶妙な色あいを感じさせる映画でした。

「天使は言った。[おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる]。マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考えこんだ(ヨハ 1:28~29)」。光り輝く天使と、困惑し恐れるマリア(1:39)。うがった見方をすればこの場面、天使は光のモノクロームだが、マリアの赤い頬や皺深い手、粗末な衣服には色彩が感じられる。

八ヶ岳伝道所のクリスマスカードは、天ではなく地上の色。「言ハ肉體ト成リテ我等ノ中ニ居リタリ(ヨハネ 1:14)」。地上に降ったキリストの色を数多の落ち葉の内から見つけられるだろうか。うまく見つけられなくとも、私たちの色はちゃんと見つけられている。Ω

